

● 奨励賞 ●

祈りの火が消える日まで

いのうえ そう
井上 総



ともえ
函館市立巴中学校2年(北海道)

「北方領土を返せ!」という日本の一方的な要求をロシアに押しつけてしまってもよいのだろうか。

私は、小学5年生から2年間、函館豆記者として北方領土問題について取材活動をしていました。取材を進めていくうちに、その考え方は、日本とロシア、両国民にとって、北方領土問題を早期解決させたいという思いとはかけ離れたものであり、問題解決を望むものとして間違っているのではないかと思うようになりました。

北方領土が旧ソ連軍により不法に占拠された直後から、北方領土返還要求運動は根気よく続けられてきました。しかし、それから75年経った今現在でも問題が解決に至っていない背景には、この問題が日本とロシア、両国民に正しく理解されていないという現実があると思います。

「なぜ、ロシアはそんなひどいことをしたのだろう。なぜ、北方領土を返してくれないのだろう。」小学5年生のときに初めて行った北方領土に関する取材。当初、昔のそして現在のロシアの行動を理解できなかった自分は、そう思っていました。かつて、日本人誰もが行くことができた、目の前3.7km先にある陸地はぼんやりと、霞んで見えました。近くに見えましたが、限りなく遠いようにも見えました。そして、自分の隣で、北方領土が返還されるまで消えることがない祈りの火が、いまだに燃え続けていることが不思議でたまりませんでした。

しかし、根室市で取材を続けるうちに、今は北方領土に住んでいるロシア人の方々にとって四島は故郷であり、私たちと同じように大切な場所であるということを知りました。そのようなことに配慮せず、強引に四島一括返還が行われたら、今住んでいるロシアの方々が、当時の島民の皆さんと同じようにつらい思いをすることになってしまう。そのようなことは絶対にあってはいけないことだと強く思うと同時に、75年間も実現していない北方領土問題解決の難

しさは、そこにあるのだということが初めてわかり、衝撃を受けました。

その翌年に、内閣府北方対策本部で取材した際、審議官が話されていた「若い人の北方領土への関心が下がってきている」「またお互いを知り、友好的な関係を作ることが大切だ」という言葉が強く心に残りました。

ビザなし交流などで友好関係を築くということは、お互いの気持ちを伝えたり、コミュニケーションを取ったりするという点で、とても重要かつ効果的ですが、誰でも参加できるわけではありません。では、私たち若い世代は何ができるのか。私には何ができるのか。

それは、北方領土問題への関心が薄れることのないよう、情報を得たり、考えたり、友人や家族と話題にしたりして、北方領土問題について少しずつでも周りに広めていくことです。

私はその活動の一環として、北方領土問題について取材してまとめた新聞を配ったり、クラスメイトや函館豆記者の後輩たちに北方領土問題について説明したり、1人でも多くの人に正しく理解してもらえるよう、自分なりに最善を尽くしてきました。

いろいろな機会を通して北方領土問題について学んだことがあれば、少しでも多くの人に知ってもらおうと思うし、国民一人一人が領土問題に関心を持ち、国民の総意で返還要求運動に取り組むことができ、そうすることこそが問題解決へとつながるのだと思います。

そして、日本だけでなく、日本とロシアの間でお互いの思いについて伝え合い、両国民が領土問題に関心を持ち、両国民が心を通わせることこそが、北方領土問題が平和に解決する道だと信じています。

願っています。いつか、納沙布岬の祈りの火が両国民全員の力で吹き消されることを。